教育

まなび場 天声人語 漢字ドリル

過去に掲載された「天声人語」から出題。❶～❻のひらがなは漢字に、漢字はひらがなにしましょう。送りがなを含む場合もあります。

天声人語

なぜ、逃げなかったのですか――。96年前に「ひめゆり平和祈念資料館」が開館したころ、沖縄戦を知らない来館者からそんな質問が多く寄せられたという。看護要員として戦場へ送られた「ひめゆり学徒隊」は戦火に巻き込まれ、軍から解散命令を出されてさまよい、命を落とした▼学徒たちは小学校から【❶てって】した軍国教育を受け、動員から逃げることなど考えられなかった。最後に放り出されたのは戦場で、逃げ場もなかった。学徒隊の生存者たちは当時の状況を懸命に伝えてきた。亡くなった仲間の代わりに伝える義務があるのだと▼2011年に出した記念誌では、2年前に亡くなった元館長の本村つるさんたちが、次世代へつなぐ思いを語り合っている。アウシュビッツ博物館の日本人ガイドを訪ね、話に心が打たれた。体験していなくても説明できると気づき、【❷後継】に託すと決めたという▼きょうは沖縄【❸慰霊】の日。80年がたち、どう語り継ぐかは重要な課題だ。伝えてもらえば、次世代も戦争の【❹実相】を知ることができる。戦争ではいつでも、「普通の人々」が巻き込まれ、犠牲になるのだと想像できる▼折しも日本時間のきのう、米軍がイランの核施設を空爆したと発表した。一軍事的な大成功」と【❺誇らしげ】に語るトランプ大統領に「人々」が見えているとは思えなかった▼「ひめゆり」の生存者たちに感謝したい。伝えてもらったから、私たちは戦下の人々を想像できる。【❻】返してはいけないと思いを新たにできる。

◇6月23日掲載

❶てってい
❷後継
❸慰霊
❹実相
❺誇らしげ
❻くり

Check 用語おさらい

＊ひめゆり学徒隊
沖縄師範（しはん）学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒たちで構成された女子学徒隊。戦場で負傷兵の看護にあたった。

＊動員
戦争遂行（すいこう）のために集められること。

＊実相
実際の様子や有り様。

＊折しも
ちょうどその時。

天声人語の書き写しを始めてみませんか。朝日新聞社では、天声人語を同じ字数・行数で書き写せる専用ノートを販売中です。詳しくはQRコードから

答え ❶幽霊 ❷こうけい ❸いけい ❹ひっそり ❺ほこらしげ ❻幽霊

勝者像とズレる自分 教室は苦手だが

不登校、ではないけれど 4

職員室・塾…「いてもいい場所」見つけ

東京都の高校3年の男子生徒は、週数回、職員室に登校している。課題をもらい、半個室の談話スペースで自習する。「ここは騒がしくないし、拘束されていない感じがする」

学校は難関の中高一貫校。中学受験の勝者だとして、周囲から称賛と期待が集まった。

だが、入学直後からつまずいた。コロナ禍による一斉休校で勉強のリズムを失い、部活動に入るタイミングも逸した。親友と呼べるような友人はおらず、何となく疎外感を感じ続けた。

中2の後半から起立性調節障害の症状にも悩まされた。朝起きるのもつらい。自慢だった学力も自信はない。学校に行っても机で気絶しているかのように過ごした。

学校に理解があり、高校には進めたが、中3の3学期からほぼ不登校状態。「君ってすごいね、もっとできるよね」。中学受験の時に周囲から期待されたった。

高1の春、小学校時代の友達が通う高校の文化祭に誘われた。キラキラした青春と自分の状況を比べて耐えきれず、すぐに帰った。「何か違えば自分もこちら側にいたのかな」

家にいる間はずっとゲームをして、死にたいという思いからひたすら逃げていた。

スマートフォンを触れば、SNSから同年代の「キラキラ」が飛び出してくる。高校生にもなればスポーツや芸術などで活躍する同世代も出てきて、ニュースになる。それを見るだけで苦しかった。「自分は何も積み上げていない」

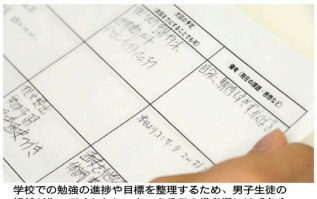
高2になると、少しずつ起立性調節障害の症状がおさまり、勉強にも取り組めるようになった。ただ教室は今も苦手だ。

そのうち、職員室に課題をもらいに行き、そのまま談話スペースでこなすことが増えた。週に数回登校し、数時間かけて問題を解く。先生が用意してくれた紙に取り組んだことや今後の目標などを書き、少しずつ自信を積み上げる。

さらに受験に向けて、不登校生らの大学進学をサポートする「河合塾コスモ」にも通う。以前は周囲の期待に応えられず、自分の居場所がわからなくなったが、今は学校の内外に「いてもいい場所」が複数あることが重要だと感じている。

不登校ではないけれど、100点でもない。でも、それでもいいと納得できる。「そんな自分自身の解釈を、ちょっとずつ見つけられた気がする」

（狩野浩平）



学校での勉強の進捗や目標を整理するため、男子生徒の担任が作ってくれたシート。ある日の備考欄には「自分に期待しすぎず、がんばる」と書いた＝9月10日

通えていても「サイン」気づいて

芳川玲子・星槎大学大学院教授（臨床心理学）の話

学校に通ってはいるけど、不登校と同様の課題を抱えている子どもたちは多いと思います。

不登校は、学校に通うか通わないかという二択ではなく、不調を訴えたり遅刻・早退したりしながら通い続けるというグラデーションがあります。そうした子は文部科学省の不登校の定義には当てはまりにくく、不登校調査の結果にも表れてきません。

本格的に不登校になってしまうと、支援するのはとても大変です。学校に通えているかどうかにとらわれず、早期のサインに気づき、放置しないことが大切です。

文科省は、自分の教室にくい子にとって学校内の居場所となり得る「校内教育支援センター」の設置を促進していますが、その質には大きなばらつきがあります。利用者が増えれば、不登校の数は減るのですが、それで問題解決とは言い切れません。

重要だなのは、校内居場所を利用する子たちが通常の教室も安心な場だと感じられることです。そのためには教室の中の学習スタイルや評価のあり方をもっと多様にする必要があります。

＝おわり

かあさんのせなか

孤児の私 瞳に映してくれた

1985年、イラン生まれ。国内外で子どもらの支援活動を続ける。児童養護施設で育った若者を描いた初監督作品「花束」を昨年公開。著書に「これから大人になるアナタに伝えたい10のこと」など。＝関口聡撮影

俳優・タレント

サヘル・ローズ さん

イラン・イラク戦争の混乱のさなかで孤児となり、本名も誕生日も分からなかった。7歳の時、フローラという女性が養母となり、以来ずっと育ててくれました。

テヘラン大学の院で心理学を学んでいた彼女は、実母から育児放棄され、祖母に育てられた過去がありました。戦争被害者の心のケアに携わっていた時、私のいる施設を訪れました。そこで「お母さんになって」と懇願してきた私の声や瞳が祖母にそっくりで、「生まれ変わりだ」と思ったそう。私にとって、誰かの瞳にじっと映ったのは初めてのことでした。本当の意味で、私がこの世界に生まれた日だと思っています。

8歳の私を連れ、日本に住んでいたイラン人の夫（当時）を頼って来日しましたが、暴力に耐えかねて貧困や戦争で苦しんでいる子どもたちの力になりたいと活動しています。不思議りになってしまう、清掃やじゅうたん織りの仕事をしながら、私を育ててくれました。風呂が無い家にいた時には、湯を沸かして台所の流し台で私の身体を洗ってくれ、クリスマスにはキャラクターの文房具をずっ買いてめて積み上げ、驚かせてくれました。

恩春期に関係がぎくしゃくしてしまいました。「血がつながっていないからマとは呼べない」と言ってしまったこともありました。でも中学校でいじめに遭い、「死にたい」と訴えたら、「否定せずやせ細った体で抱きしめてくれたんです。そこから弱音を吐き合える関係になれました。

いまも2人暮らし。「一生まれ変わったら、もう一度あなたのお母さんになりたい。赤ちゃんのサヘルを見てみたいから今度は私がお腹から生まれてきたい」って言うんです。私にとって母はフローラだけ。母の背中を見てきたから、私も2人で家を飛び出しました。でも母子家庭でたくさんの人に戻れば、私は施設に逆戻りしてしまう、清掃やじゅうたん織りの仕事をしながら、私を育ててくれまして